

前号まで、歯周病と認知症リスクについてお話をしたが、今月は、昨今話題の「遺伝子検査」について、歯科医の立場からお話をしてみたい。

現在、遺伝子検査自体は、驚くほど手軽に受けられるようになっていく。ネットで「遺伝子検査」を検索すれば、検査キットが購入できるサイトが数ある。

ただ玉石混交であるという点は注意していただきたい。

遺伝子検査は、一部の遺伝性の疾患（乳がんなど）、その治療の過程では、すでに活用されている。が、すべての疾患について、特定遺伝子の有無だけで、必ずその病気になるかと断定できるところまで、診断技術は確立されていない。

ましてや最近問題視されている、才能診断、体質診断などは、科学的根拠が薄く、占いと同程度、と見ておかれるべきだろう。



筆者のクリニックでも、四年ほど前から、治療の補助的ツールとして、遺伝子検査を取り入れている。この

遺伝子検査には大きく分けて病気に罹りやすい体質かどうかを調べる体質遺伝子検査「DNA検査」と、がん遺伝子やがん抑制遺伝子の今の状態を調べ、疾病判断を予測する検査「RNA検査」がある。前者は親から受け継いだもので先天的リスクを判断し、後者は食事や運動ストレスなどの生活習慣に影響される後天的リスクを判断できる。

クリニックでは、インプラント治療

健康な老後「気づき促す遺伝子検査

療や、顎の骨の強度などの診断に使っているが、あくまでも、病気そのものの診断に使うのではなく、疾患治療を円滑に進める目的がある。

例として、どのようにインプラント治療に応用するのか説明しよう。

インプラント治療は歯肉を切開して歯槽骨という顎の骨にチタン製の金属を埋める治療だ。そして、インプラントは長期にわたって安全に機能させる必要がある。

手術受けるその時点での身体の状態は、血液検査などの健康診断である程度捕捉できる。しかし、せっかく施したインプラントも、機能を低下させるリスクのある病気、糖尿病や骨粗鬆症などに罹りやすい方には、リスクを織り込んだ治療が必要になる場合がある。そこで遺伝子検査を当院では活用し、生活習慣病など疾患の罹りやすさを予測。インプラント治療でもっとも大切であるメンテナンスに生かしている。

ただ、病気のなりやすさは予測できるが、あくまでも予測であり、その確率は数%だ。より大事なのは、生活習慣病などに罹らないように自分の生活を見直すきっかけにすることが大きな目的だ。

罹りやすいと思われる遺伝

子を持つっていると分かれば、早いうちから自分で注意できるのだ。

いわゆる「ガン検査」（血液から調べるがん遺伝子発現検査）も、ガンに罹っているのかを調べる検査ではない。ガン細胞に成長するリスクを持つているのかを調べる検査だ。この検査でイエローカードが出たら未病段階でリスクを縮小させることが目的となる。早いうちから自分の生活習慣を見直し、ガンのリスクをさらに小さくできるのである。

ガンは早期発見が大切といわれる。ただ、ガンが見つかった時点で、小さなガンでも治療のプロセスに入る。しかしガンそれ自体でなく、ガン遺伝子の発現を早く見つけられたなら、自己免疫で排除することも可能だ。早期発見ではなく、超早期発見」ということになる。

このような検査ができるすばらしい時代が来ている。人生の最後を、病気との闘いで終わらせないようにしたいものだ。

顎関節症
ドライマウス
舌痛症

ストレスは見える！

すべては「噛みしめ」が原因だった

高次歯科クリニック
亀井 英志
Kamei Hideshi

気がつくとも歯を食いしばっている、…。心当たりの方は、当コラムの亀井医師の著書『すべては「噛みしめ」が原因だった』をお読みいただきたい。未病、の原因をまとめた良書です。

亀井英志(かめいひでし)

1951年群馬県前橋市生まれ。76年東京歯科大学卒。都立病院歯科口腔外科医を経て、84年より長栄歯科クリニック院長。臨床ゲノム医療学会理事。

